

琉球大学学術リポジトリ

東南アジアにおけるバイオマス利用に関する国際シンポジウム 経過報告

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上野 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017490

「東南アジアにおけるバイオマス利用に関する国際シンポジウム」

【経過報告】

1. 開催に至る経過

本シンポジウムを開くにあたっての経過の詳細はニュースレターNO. 2～4に詳細に述べてあるが、開催までのスケジュールを略記すれば次の通りである。

昭和56年4月 かねてからの農業機械学会より当地においてバイオマス関係のシンポジウムを開くよう要請を受ける。

昭和57年3月 シンポジウム開催案を事務局で協議

同4月 理事会で農機学会との共催承認

同7月 國府田会長、森田理事東南アジア諸国をまわり参加を要請

同7月 沖縄県に共催を要請 了承（総務部長）

同7月 外務省、柳局長を通じJICAに共催を要請 了解

同9月 理事会にて実行委員会発足

同10月 総会にてシンポ関係予算の承認

同10月 発表申込締切

同12月 実行委員会開催

昭和58年1月 論文提出締切 同時通訳用英文和訳開始

同2月 プロシーディング製作開始

同2月 参加申込み締め切り

同3月 プロシーディング完成締め切り後の論文のために別冊 製作開始

同3月 最終実行委員会開催

同3月末日 別冊完成

2. 日程

- 4月1日 知事招宴 (パシフィックホテル)
 4月2日 シンポジウム (パシフィックホテル)
 4月3日 シンポジウム (琉球大学), 那覇見学
 4月4日 シンポジウム (琉球大学), 県知事表敬訪問
 4月5日 見学会
 4月6日 見学会及びポストコンGRESツアー

3. プログラム

* 4月2日 (土) (パシフィックホテル)

- 9:00 開会の辞 梅田 重夫 (大阪府立大学)
 歓迎挨拶 國府田佳弘 (琉球大学)

OPENING LECTURE

アジアにおける森林資源の利用と保護

Kamaruddin A. (ボゴール農科大学副学部長, インドネシア)

アジアにおける開発中の経済植物の探索目録

—重要かつ緊急に必要とする経済植物学理論—

T. Koyama (ニューヨーク植物園アジア部長, N. Y. 市立大学, 米)

REVIEW SESSION, PART I

10:30 SECTION I. エネルギーとしてのバイオマスの利用

1. 液状エネルギー源としてのバイオマスの利用 竹田 策三 (三重大学)
2. メタンガスとしてのバイオマスの利用 山沢 新吾 (筑波大学)
3. パームオイル製造廃棄物のエネルギー源としての利用
K. K. Chin (シンガポール国立大学, シンガポール)
4. 植物油からの重油の製造
Aldo M. (サンパウロ州技術研究公社, ブラジル)
5. サンパウロ州工技研におけるブラジル農業の将来に向けての天然資源研究センター設立計画 T. Morita (サンパウロ州技術研究公社, ブラジル)

13:30 SECTION II. 生物産業における残渣および廃棄物の新資源としての利用

1. 畜産廃棄物をバイオマス資源として利用する際の工業技術

- E.P.Taiganides (FAOシンガポール駐在員, オハイオ大学, 米)
2. 有機質廃棄物の再利用 小林 達治, 吉田 忠幸 (京都大学)
 3. タイ国における農業残渣の利用の現状と将来
W.Arthayukti (チュラルンコン大学, タイ)
(代読 Ungghakorn)

バイオマス・ランド SESSION

- 15:30
1. 沖縄におけるバイオマス・ランド計画の概要 森田 大 (琉球大学)
 2. ブラジルのエネルギー開発におけるバイオマスの役割
G.Israel (サンパウロ州技術研究公社, ブラジル)
(Aldo M.代読)

ポスターセッション

- 10:30-11:30, 15:30-16:30
1. 光合成菌による有機排水処理とその有効利用 田知本正夫他 (京都大学農学部)
 2. インドネシアにおけるキャッサバ粕の利用
加藤 清昭 (農林水産省食品総合研究所)
 3. IPT (ブラジル技術研究開発公社) の紹介 (IPT)
- 18:00 懇親会

* 4月3日 (日) (琉球大学農学部)

REVIEW SESSION, PART II

- 9:00 SECTION III. 熱帯地域におけるバイオマス利用の将来
1. アジア-太平洋地域におけるバイオマス資源の開発と環境条件
M.A.Aziz (シンガポール国立大学, シンガポール)
 2. 日本におけるホテイアオイの利用の現状と可能性
金城 晴朗 (沖縄県農業試験場)
 3. 固定化酵母菌体によるアルコールの連続発酵
鮫島 廣年 (協和醸酵工業株式会社)
- 11:00 SECTION IV. バイオマス資源のパルプとしての利用
1. 熱帯産繊維質の過酸化水素法 (PAP) によるパルプ化
御田 昭雄 (工業技術院化学技術研究所)
 2. ブラジルにおける竹のバイオマス資源としての利用とその将来
A.Azzini (カンピーナス農業技術研究所, ブラジル)
(坂井 代読)

13:00 那覇見学

* 4月4日(月) (琉球大学農学部)

9:00 特別講演

1. 中国における石油工業排水の農業用水としての利用
呉 維中 (中国科学院林業土壤研究所副所長)
2. パームオイル工場における溢流物の好気性菌処理における動力学
H.A.Ming (マラヤ大学, マレーシア)

10:00 一般講演

1. 未開発植物資源の有効利用に関する基礎的研究 知念 功 (琉球大学農学部)
2. 無稀釈メタン発酵における消化液の性状
田畑忠行 (セイフティエンジニアリング (株))
3. 付着菌体流動法による沖縄産廃糖蜜のアルコール連続発酵試験
木田建次他 (日立造船 (株))
4. 家畜ふんの堆肥化に関する基礎的研究—排出ガスの組成分析による乾物分解の解析
木村俊範他 (岩手大学農学部)
5. 液状家畜ふん尿からの熱回収に関する研究—好気性発酵基礎実験装置の試作—
樋元淳一他 (北海道大学農学部)
6. ビート工場排出物のコンポスト化による圃場還元
松田従三他 (北海道大学農学部)
7. 有機性汚泥コンポスト化の研究—消化処理汚泥, し尿汚泥等について—
伊澤敏彦他 (農業機械化研究所)
8. 牧草の固液分画利用に関する研究—副資材を利用したジュースの乾燥処理法—
中川西弘之他 (草地試験場)
9. もみがら熱風発生装置による利用による穀物の乾燥試験
藤田昭三他 (北海道立中央農試)
10. バイオマスの高熱量ガス化に関する研究—生成ガス組成—
国吉 光他 (東京電気大学理工学部)
11. バイオマスの高熱量ガス化に関する研究—圧縮ペレット—
国吉 光他 (東京電気大学理工学部)
12. 木質ペレットだき燃焼装置の加温施設への利用に関する研究
岩尾俊男他 (島根大学農学部)
13. 木質バイオマス (まき) 燃焼炉の利用の現状と問題点
清水 浩他 (岩手大学農学部)
14. ハッカ油の火花点火機関への応用 寺尾日出男他 (北海道大学農学部)
15. オレンジ油・ユーカリ油混合燃料の火炎伝播特性 法貴 誠他 (三重大学農学部)

16. パーム油燃料の圧縮点火機関への応用

竹田策三他（三重大学農学部）

16:00 総括および討論

4. 参加者

シンポジウム参加者

	海外	本土	沖縄	計
大学・官庁	34	136	56	226
会社・団体	—	50	45	95
計	34	186	101	321

5. 協賛団体

シンポジウムの期間中、下記の会社、団体から御協賛をいただくことができました。誠にありがとうございました。

- ① 沖縄県花卉園芸農業共同組合
- ② 沖縄県経済農業共同組合連合会
- ③ 沖縄県酒造組合連合会
- ④ 沖縄製粉株式会社
- ⑤ 沖縄通運株式会社
- ⑥ 沖縄ナショナル住宅株式会社
- ⑦ オリオンビール株式会社
- ⑧ 株式会社沖医理科
- ⑨ 株式会社ブランド研究所
- ⑩ 瑞泉酒造株式会社
- ⑪ ソーラー株式会社
- ⑫ 南星保温株式会社
- ⑬ 文教図書株式会社
- ⑭ 有限会社東南資源開発

また、準備、運営にあたりまして下記より協力をいただきました。

- ① 栄光堂印刷
- ② 沖縄上島珈琲株式会社

- ③ (株) 沖縄ツーリスト
- ④ 光文堂印刷 (株)
- ⑤ 国際プラザホテル
- ⑥ 末吉印刷所
- ⑦ トータルプロデュース&コンベンションサービスセンターMAP
- ⑧ 日本コンベンションサービス (株)
- ⑨ パシフィックホテル沖縄
- ⑩ ホテルニュー沖縄
- ⑪ 琉球大学生生活共同組合

見学コースにあたりました次の団体には大変お世話になりました。なお、名護パラダイスもコースに入っていましたが、時間の都合で割愛させていただきました。おわび申し上げます。

- ① 沖縄県農業試験場
- ② ミバエ対策事業所
- ③ 宜野座村松田土地改良区
- ④ 北部製糖株式会社
- ⑤ オリオンビール名護工場
- ⑥ 海洋博覧会記念公園管理財団

6. 反省

シンポジウムの後処理が一段落した今振り返ってみると、「よくやれた」というのが実感である。当初は東南アジアから2～3名呼べればよい程度の計画でスタートしたが、迂余曲折を経ながらも、時が味方したのか大変な盛会になってしまった。“なってしまった”とはいささか無責任な感がしないでもないが、夢中になって準備しているうちに予期しなかった方向に進展したのである。心配していた準備不足も勢いに乗って何とかカバーできた。“終わり良ければすべて良し”ではあるが、今後のためにいくつかの反省点を簡単に上げておきたいと思います。

まず、計画の確定が遅れたこと。これは準備期間、組織の状態その他を考えるとやむを得ないことではあったが、次回は早くから十分な計画を立てて当たることが望ましい。とはいっても、国際シンポには不確定要素が付きものであるので、臨機応変な体制も必要であろう。

次に、各種連絡、あるいはPRの不徹底。これも各種の要因が重なったせいもあるが、文書での連絡はなかなか徹底しなかったようである。会員の皆様は今後ともニュースレター等には十分目を通していただきたいと思います。

最後に、準備の不十分さ。これは一重に事務局の努力不足に起因したものです。

(庶務幹事上野記)

なお、この他にも、受け付けをスムーズにしてほしい、他の学会等との関係を考えて開催時期を決めてほしいとの意見もありました。